

古いことは新しい。
日本人の文化と
最新の戦略で臨んだ
北京五輪。

ゲスト◎バレーボール全日本男子監督

植田 辰哉氏

プロフィール◎うえた・たつや

1964年香川県生まれ。中学時代にバレーボールを始め、大阪商業大学付属高校から大阪商業大学に進学。卒業後、新日鉄に入社し日本リーグで活躍。ポジションはセンター。5年連続で日本リーグベスト6に選出された。92年のバルセロナ五輪でキャプテンを務め、6位入賞を果たす。現役引退後は指導者として99年新日鉄男子バレー部監督、03年全国ジュニア男子チーム監督、04年全国男子シニアチーム監督に就任し現在に至る。05年アジア選手権で10年ぶりに1位、08年北京五輪では、男子バレーとして16年ぶりに五輪出場を果たした。

バレーボール人生の基礎を作り、 責任感を培った学生時代

—まず、バレーボールとの出会いを教えてください。

父から武道を勧められ、小学2年生から6年生まで剣道をやっていて、将来の夢は警察官になることでした。中学では有段者になりたかったのと、憧れの先生が顧問をされていたので剣道部に入ろうと思っていました。ところが、入部した翌日に先生が急逝され途方に暮れていたなら、バレーボール部の顧問の先生に「背も高いし、やってみないか」と誘われて入部したこと

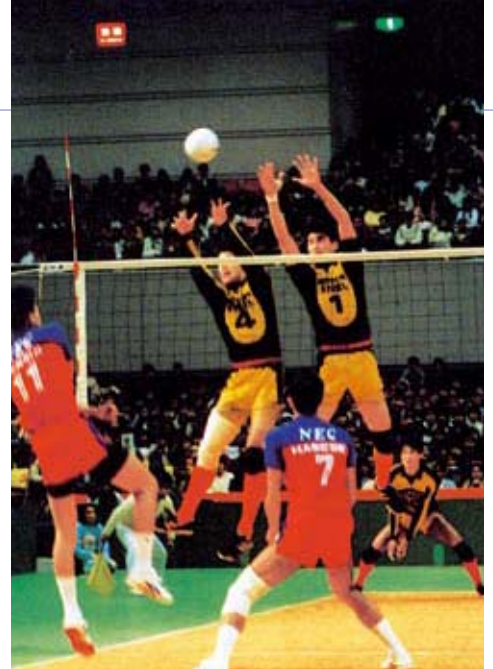
がバレーボールとの出会いです。通っていた白鳥中学校は香川県の代表になるような強豪だったので、強い



剣道少年だったころ。後列中央が植田氏



新日鉄(現 堺ブレイザーズ)時代 90年日本リーグ優勝 右から4人目が植田氏



新日鉄(現 堺ブレイザーズ)時代

先輩たちに憧れ、3年生になったら自分も全国大会に出たいと思うようになりました。

その後、県内の高校からスカウトされ、練習も見学していたのですが、テレビで春の全国高校バレー決勝戦、藤沢高校と大商大高校(大阪商業大学附属高校)の試合を見て衝撃を受けました。日本一を狙う高校と県内の強豪校とのレベルの違いと技術的格差を感じ、どうせやるなら強いところで自分を鍛えたいと思いました。大阪まで行って練習を見学したり、願書を取り寄せて勉強して受験しました。

無事合格して入学し、バレーボール部に入りましたが、大商大高校には身長190cmを超える選手がざらにいて、当時178cmだった僕はスカウトされた選手と異なり、まだ体育館で練習させてもらえず、外で懸垂したり、走ったり、1年間基礎的なトレーニングを積んでいました。その間に、身長が13cmほど伸びたのですが、そのとき無理な練習をしていなかったおかげで、体が故障することはありませんでした。あるとき、外を走っていたら、監督の上野先生が前から自転車で来たので挨拶をすると、「君は背が高いけど、何のスポーツをやっているんだ？」と聞かれて(笑)。そこで目に留めてもらってからは、体育館で練習させてもらうようになりました。後にオリンピックに選手として出場したときも、「自分がスカウトした選手じゃない植田がまさかオリンピックまでいくと思わなかった」と笑い話になりました。

—— その後はバレーの道を突き進まれました。

高校から大学にかけての7年間は、僕の人生に大きな影響を及ぼしています。体育会系で完全な縦社会の中で、春の全国高校バレーやインターハイでの日本一やユニバーシアードを目指して、のたうち回るような厳しい練習を繰り返して、下積みを経て上級生へと。縦社会の頂点の大学4年生になると、下積みの辛さはなくなるけれど、大商大が築いてきた伝統を守るとい

う責任はととも大きくなる。そういう環境で僕のバレーボールに対する考え方が培われました。

—— バレーボールのチームとして新日鉄を選ばれた決め手は何でしたか。

大商大からは、新日鉄、神戸製鋼、松下電器という関西エリアのバレーボールの強豪企業に多くの先輩が入っていて、練習にも参加しましたが、最も練習に行きたくなかったのが新日鉄です(笑)。今の全日本女子バレーの柳本監督の下で厳しくしごかれており、ここに行ったら地獄を見るだろうなど(笑)。でも僕たちは叱られることに慣れていたし、例えばレシーブが悪いとき、新日鉄の先輩に的確な指摘をされることがすごく新鮮でした。新日鉄が日本リーグを連覇した黄金時代をずっと見てきたので、鉄人というイメージも強くありました。また、企業の中には、選手が大学1年生のうちに内定を出して、資金面で援助するようなどころもありますが、新日鉄は、4年生の時に見て全日本に入れるような逸材だけを採用するという姿勢が僕は好きでした。今僕は全日本の監督をしていますが、4年に1度のオリンピックに、選手はコンディションのピークを持ってこないといけません。新日鉄の考え方は全日本代表チームの考え方とも合っており、だからこそ過去にオリンピック選手をたくさん輩出してきたのだと思います。

日本のバレーボールの 火を消さない重圧と戦う

—— 選手として出場されたオリンピックについてお聞かせください。

オリンピックにはずっと憧れていました。ソウルオリンピックのときは、代表に選ばれたものの最後に残り3名の中からはずされて、いろいろ考えた時期もありました。92年のバルセロナでは松平さん(現日本バ



キャプテンとして出場したバルセロナ五輪

© フォート・キシモト

レーボール協会名誉会長) からすごいプレッシャーをかけられ、予選の前に带状疱疹になりました。東京オリンピック以来男子バレーは途切れずに五輪に出場しているのだから、出場するのは当たり前、メダルを取ることが至上命令でした。もし出場できなかつたら、キャプテンである私のバレーボール人生が終わるのは当然だが、ママさんバレーから小学生まで、一瞬にしてバレーボールの火を消してしまうと言われました。バレーボール人口のピラミッドの頂点が全日本シニアだとすると、頂点が倒れたら、競技としての値打ちがなくなる。だからバレーボールに携わる多くの人の希望の火を消すことは許されないと。準々決勝でブラジルに負けたのは悔しかったですが、その前のソウル五輪惨敗から考えると6位入賞というのは満足できる結果だったと思います。

——引退後は、指導者としての道を歩まれています。全日本シニアの監督にはどのような経緯でなられたのでしょうか。

日本のバレーボールは欧米型のデータ重視が変わってきていましたが、実力が伴わない。逆三角形のように戦術や理屈で頭でっかちになっていて基礎がないから倒れてしまうのだと感じていました。僕は全日本ジュニア監督を務める中で18歳くらいの選手と接して、日本男子バレーボールを立て直すには、昔のスタイルの良い部分と新しい部分をミックスして強



北京五輪最終予選で指示を出す

化していくべきだと感じました。日本人は新しいものが好きですが、日本人にしかわからない文化があると思ひ立候補し、選出されました。

74年のミュンヘンで頂点に立ってから30年間ゆるやかに下降し、五輪に出られなくなり、今まで負けたことがないパキスタンなどのチームにも負けたりする時代が続きました。その立て直しですから、現状をすべて否定しました。チームスポーツは何かをきっかけの一つにまとまらなければいけない。まず姿からでもいいからと、全日本男子では寝癖のついたような頭や茶髪は禁止だと最初のミーティングで言いました。

そして生活全般にわたっていろいろ準備をしました。若い選手は食が細く、体格も貧弱でパワーがありません。平気で人前でたばこを吸ったり不摂生している選手もいました。そこで、4年後到北京五輪に行くために2年サイクルで具体的な数値や目標を設定しました。キーワードは「医」「食」「住」。「医」は「衣」ではなく、健康な体という意味で、「食」は食事の改善、「住」は生活環境です。トレーニングコーチや栄養士、メディカル、アナリストなどの専門家を入れて、例えば「食」については、どの時期にどのようなトレーニングをしたいか、そのメニューに耐えるにはいつ何をどれだけ食べさせるかを検討しました。選手たちには、とにかくものすごい量を食べさせました。トレーニングも最初の1年は器具を使わない自重トレーニングで身体能力を高めました。そして1年ごと、1カ月ごと、1日ごとの目標を設定し、トレーニング内容を細かく決め、限界のその先までやらせました。

——選手から反発はなかったのですか。

最初のころは、表面的には聞いているようでも、当然あったと思います。でも監督というのは好かれようと思つたらできません。選手たちにはまんべんなく罵声も浴びせたと思いますし、そうやってぶつかって、いろいろな問題を乗り越えて、チームとして一つになれたと思います。

2005年、10年ぶりにアジア選手権で優勝して、選手



北京五輪で審判に選手交代を告げる

© フォート・キシモト



私たちも手ごたえを感じ始めたのではないのでしょうか。その年の暮れに行われたワールドグランドチャンピオンズカップは日本で開催されたため元々出場できたのですが、アジアの1位という誇りを持って出ることができました。2006年には世界選手権でベスト8になるなど、成果が現れることで、選手たちの気持ちも大きく変わってきたと思います。

——北京五輪の最終予選のプレッシャーは相当大きかったと思いますが、どのように乗り越えられたのでしょうか。

バルセロナ五輪の監督だった大古さんから、覚悟しておけと言われていましたが（笑）、キャプテンの時に感じた以上の重圧でした。これで負けたら全日本選手を輩出しているような企業の中でもバレーボールへの支援に対して反対意見が出てくるかもしれません。当然、家族も周囲から何か言われるでしょう。うれしかったのは、小学6年生の次男と電話で話していたとき、「頑張ろうね」と言われたことです。「頑張っ」ではなく、家族も一緒に戦っているんだと励まされました。

穴があくんじゃないかというくらい胃が痛かったのですが、最後のアルゼンチン戦で荻野がスパイクを決めた後、頭が真っ白になり崩れ落ちて。後からテレビの映像で自分があして床に倒れていたことを知ったくらいです（笑）。

若い人は、対話してくれる 上司を待っている

——今、北京五輪を振り返って、どのように考えていますか。

オリンピック出場が決まってから、壮行会やイベントが続いて直前に十分な練習ができなかったという反省点はあります。でも、新日鉄の三村会長をはじめ、多くのスポンサー企業の方が喜んで応援してくださいったことは、オリンピックに出場できた一つの成果だと思います。

予選までホームでの試合が多かったので、ファンのムード作りなどの後押しがありました。オリンピッ

クでは、暑さや反日感情、技術的格差など壁となることが詰め込まれています。それに耐えられるだけのチーム力を持たなければ勝てません。選手たちがこうした競技環境を体験したことは、大きな財産だと思います。オリンピックに16年間出場していませんでしたが、出たことで、初めて見えてくるものがあります。解散するとき選手たちに言ったのは、「君たちは今まで全日本選手だったが、今後は日本で12名しかいないオリンピック選手なんだ」と。プレミアリーグに戻ったとき、オリンピック選手がいるチームは違うと思われるように、選手同士がしのぎを削ることが、プレミアリーグの価値向上において意味があると思っています。また、今回オリンピックに出場したことで、ジュニア選手の目の色が変わってきています。オリンピックに行ってもいないのにメダルを狙うと言うのは現実感がありませんが、ジュニアの世代はメダルも視野に入ってきますし、こうしたモチベーションによっていい人材が確実に育っていくと思っています。

——最後に、読者へのメッセージをお聞かせください。

新日鉄は「鉄人」として長く受け継がれてきた遺伝子を持ち、私にも新日鉄マンとしての誇りがあります。古いものは新しい。全日本男子バレーにも受け継がれていくべきものだと思いますし、僕にできることはこれからも精いっぱいやっていきます。

また今は核家族化が進み、年代ごとに考え方もずいぶん違います。僕のような30～40歳代の中間管理職が時間をかけて若者と接してしっかり育ててほしいと思います。よく「今の若者はダメだ」という言葉も聞きますが、それは自分たちがダメということ。選手が言うことを聞いてくれないのは選手がダメなのではなく、こちらが導くことができないからです。例えば、「調子はどう?」と聞いて、「普通です」と返してくる選手がいたら、「何が普通なの?」「いや、わかんない」「それでは俺にもわからないよ」と、1時間くらいずっと聞き出すと、最後には議論に結びつく。時には厳しく接することも必要ですが、コーチングをして導くことが重要です。